

長岡京跡北辺地域における条坊道路の発見
野田遺跡第 10 次調査 現地説明会資料

所在地 京都府向日市森本町野田地内
調査期間 平成 20 (2008) 年 5 月 8 日 ~ 9 月 8 日 (予定)
調査面積 1396 m²
調査所管 向日市教育委員会
調査主体 財団法人向日市埋蔵文化財センター (調査担当 調査係主任 梅本康広)

1 はじめに

調査地は桂川の右岸に広がる沖積低地に位置します。野田遺跡は弥生 ~ 古墳時代にかけての集落遺跡で、その南端は長岡京跡と重複しています。これまでの調査では弥生 ~ 古墳時代の土器類を多く含む溝跡や流路跡が確認されています。しかし、集落にかかわる建物遺構はまだ確認されていません。また、調査地から南側へ約 40m 離れたところでは長岡京跡の北限に推定されている北京極大路が通過し、これと交差する東二坊坊間西小路とともに両道路の側溝がみつかっています。長岡宮跡 (宮城) の中軸線上でおこなわれた宮第 316 次調査では、北京極大路から 1 町分北側まで条坊街区 (区画) が確認されており、左右京域でも同様の展開をみることができると課題とされていました。

今回の調査では、野田遺跡の実態を明らかにするとともに、長岡京跡の北側へのひろがりについて確認することが主な目的になりました。とくに、調査区の位置は東二坊坊間西小路の延長上にあたり、この遺構の存否は長岡京跡の条坊復原を考える上で重要な鍵となるため発見に期待が寄せられました。

2 発見された遺構と遺物

〔東二坊坊間西小路跡〕 調査地の中央を約 9m の間隔をあけて南北に併走する二条の溝が確認されました。調査地の南側約 100m 地点で確認された東二坊坊間西小路の東西両側溝の延長上にあり、長岡京期の土器類を多数伴うことからその道路跡と判断されます。東側溝 (SD02) は総延長約 40m 分を検出しました。この北端は途中で終息し北へ延びていきません。溝幅は約 0.8m、深さ 0.1m であり、遺存状況はよくありません。西側溝 (SD01) は幅約 1.2m、深さ 0.2m あり、土器類や平城宮式軒平瓦が出土しました。なお、この路面上には溝 SD22・23 がつくられていますがその性格はよくわかりません。

〔掘立柱建物跡 (SB03)〕 調査区の南西側で確認された南北長 4.8m (桁行 3 間)、東西長 4.6m (梁間 2 間) の平面正方形の南北棟建物です。西側溝から西へ約 4m 離れた位置につくられています。

〔柵跡 (SA08・09・11)〕 東二坊坊間西小路東側溝に沿ってつくられた柱間 2 間の柵跡です。各柱穴の大きさは一辺約 0.4 ~ 0.5m、深さ 0.2m で、並びが不連続であることから消失した柱穴が他にあった可能性があります。また、同路の西側溝付近にも SA05・07 が設けられています。

〔井戸跡（SE04）〕 東二坊坊間西小路東側溝が途切れた北東側で確認された平面略方形の井戸です。内部に縦板を立て横板で留める構造で、その大きさは南北 0.65m、東西 0.90m、深さ約 0.8mです。土師器、須恵器、丸瓦が出土しました。

〔河道跡（SR10）〕 調査地を北西～南東方位に流れる古墳時代前期に埋没した河道跡です。幅約 27m、深さ約 1.5mの大きさで、この北岸に隣接する土壌SK13とともに埋土中から古式土師器が多数出土しました。

3 まとめ

今回の調査成果については以下のようにまとめることができます。

〔1〕 長岡京跡の左京域でも北側に条坊道路が延びていく状況が確認され、条坊街区がさらに北方へ広がっている可能性が高くなりました。

従来の復原と問題点 これまでの長岡京の条坊復原は、南北九条半・東西八坊で宮城を京北端に配置する平面構造として理解されてきました。ところが、近年の調査で宮城・京域の北限位置について見直しが必要になってきました。1995年の宮第316次調査では北京極大路に想定されていた道路が小路規模であることがわかり、北限位置は二町南の北一条大路に修正がおこなわれ、その北側は苑地空間である「北苑」として評価されました。しかし、2000年におこなわれた宮第390次調査で、北一条大路に沿って宮城北面中央門や北面大垣が築かれていなかったことがわかり、この位置が北限である妥当性は低くなりました。現在ではさらに南側の一条大路までの何処かに比定する見方が強くなりました。

長岡京跡北辺地域の調査成果とその評価 宮城・京域の北限が定まらない中で近年、長岡京跡の北側で長岡京時代の遺構が確認される事例が増えてきました（図2）。京内の条坊位置と一致する道路跡（印）やその内側で掘立柱建物跡と井戸跡（印）などが確認されており出土遺物の内容もあわせると、京内の宅地と同じ様相であることがわかっています。このような事例が条坊街区と無関係に存在するとは考え難いように思われます。

ところで、今回の調査地は左京の北京極大路から1町北側に位置します。この付近までは宮城の北側と同様に条坊街区が設けられていた可能性は高いものと思われれます。また、東西大路級条路が見つかった修理式遺跡第12次調査地点まではさらに3町あります。東一坊大路についてはその付近まで延びていることがわかっています。はたして条坊街区がそのような位置まで広範囲に展開していたかは、明確にすることはできません。しかし、京内の南北坊路の延長上につくられた大路と小路が北辺地域で確認されている限り、東西条路と交差して街区が形成されていた可能性は十分に考えておく必要があります。

このように見てきますと長岡京の都市計画については、わたしたちが考えていた以上に北側までおよび、計画性の高い開発がおこなわれていたのかもしれない。

〔2〕 古墳時代に埋没した河道跡を確認し、野田遺跡の集落構造の一端を明らかにすることができました。

現在の寺戸川につながる古墳時代前期に遡る河道で、埋没の過程で投棄された古式土師器によって近在した集落の時期を特定する資料になりました。また、調査地の南西側には同時期の遺構や遺物が希薄であり、集落はその北西側に展開していた可能性が高いものと思われれます。

以降の図は A3 のものを A4 に縮小してありますので縮尺は表示と異なります

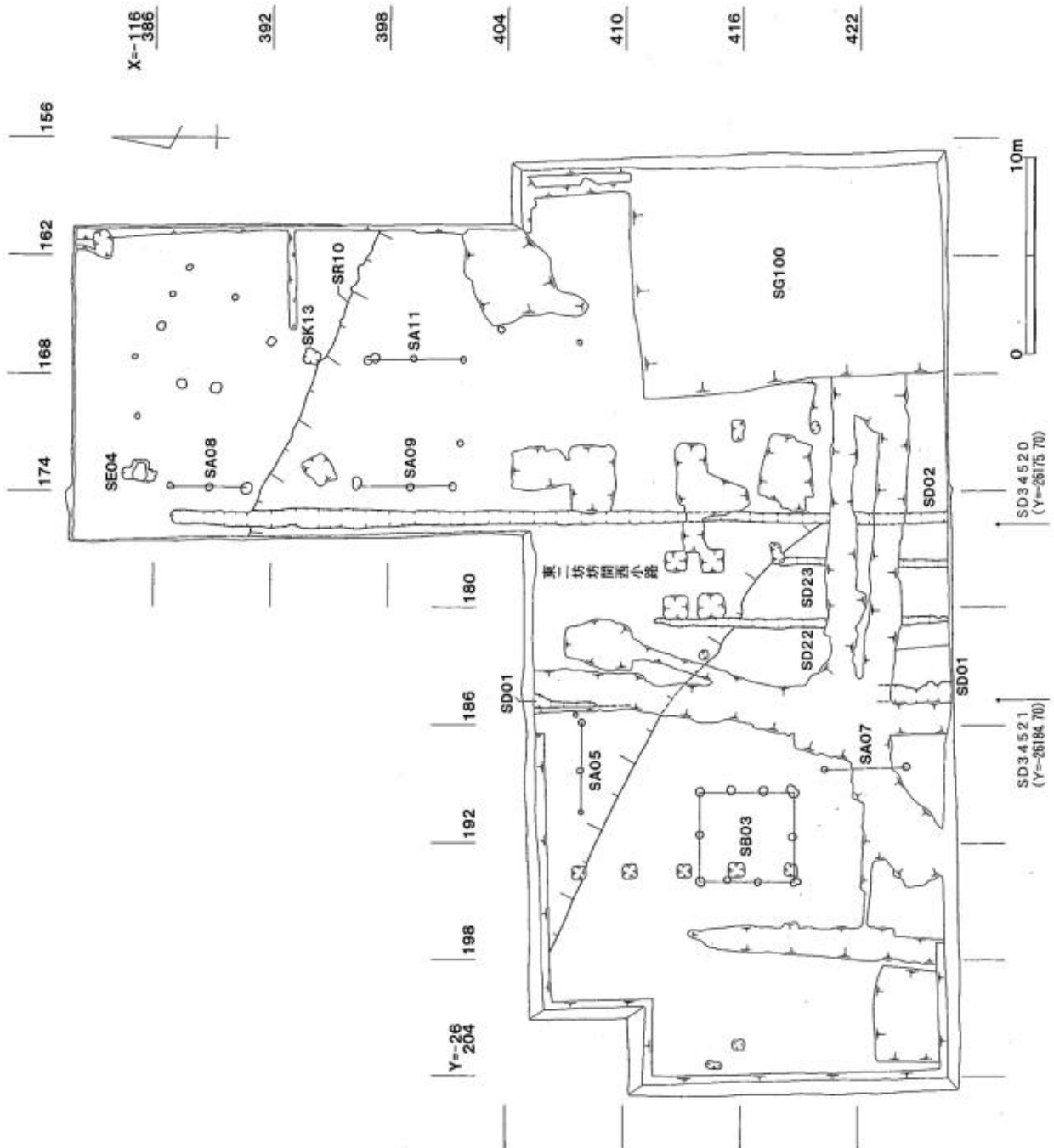


図1 調査地遺構平面図 (S-1/200)

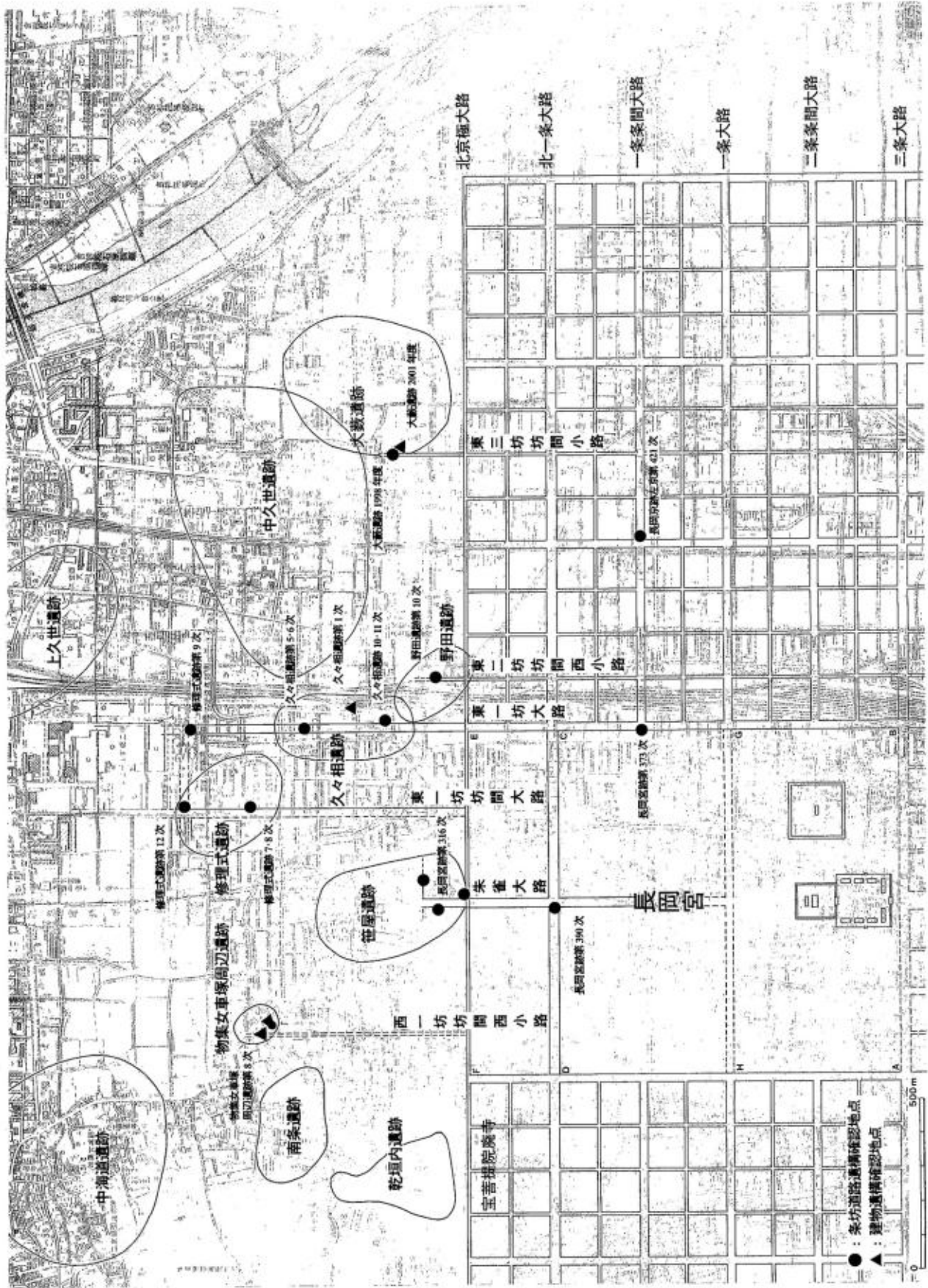
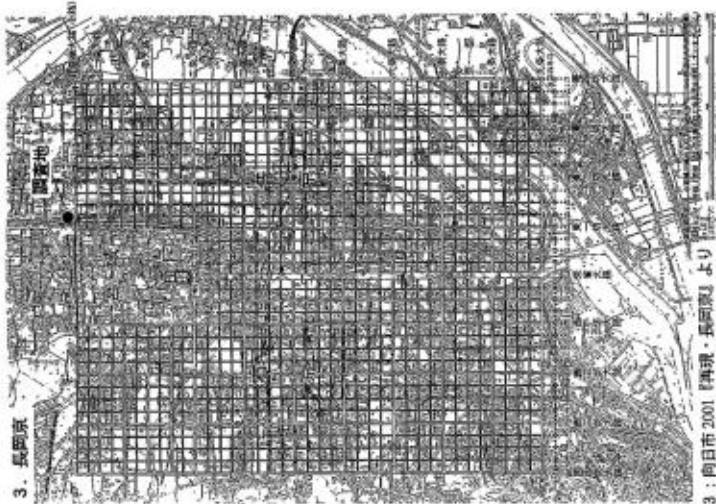
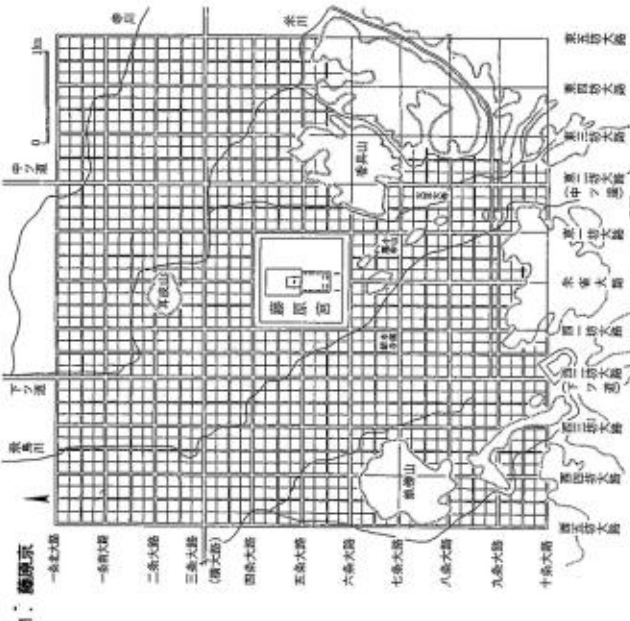


図2 長岡京跡北辺地域の長岡京遺構分布図 (S=1/10000)

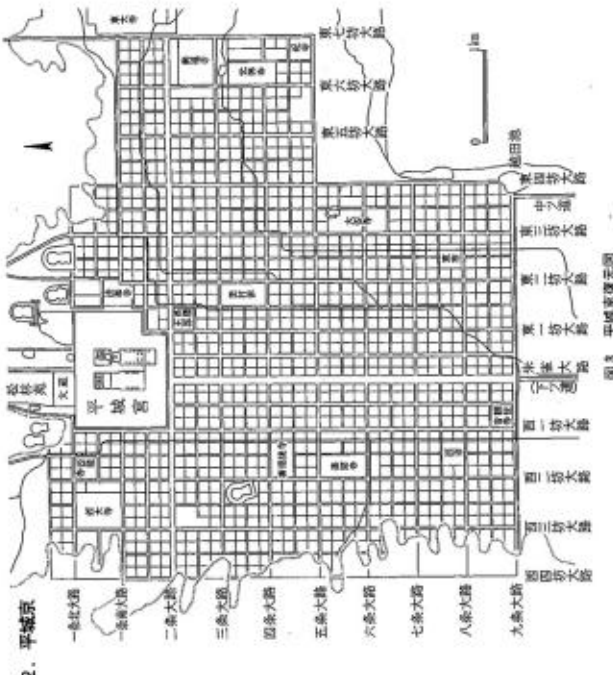
遺跡名	調査期間	検出遺構	出土遺物	調査機関
久々相遺跡第1次	1994.8.1~10.7	掘立柱建物3棟、井戸1基、柵1条、塀1条	難波宮・長岡宮式軒瓦、長岡京前半期の遺物群	財)向日市埋蔵文化財センター
久々相遺跡第5次	1999.1.11~3.5	東一坊大路東西側溝	土師器、須恵器、土馬	財)向日市埋蔵文化財センター
久々相遺跡第6次	1999.3.10~3.31	東一坊大路西側溝、掘立柱建物1棟	土師器	財)向日市埋蔵文化財センター
久々相遺跡第10・11次	2003.5.6~6.30	東一坊大路東側溝	須恵器	財)向日市埋蔵文化財センター
修理式遺跡第7・8次	2003.5.20~10.6	東一坊坊間大路東側溝		財)向日市埋蔵文化財センター
修理式遺跡第9次	2004.1.20~3.19	東一坊大路西側溝、北京極大路から790.5m北まで確認	土師器、須恵器、製塩土器、土馬	財)向日市埋蔵文化財センター
修理式遺跡第11次	2004.6.8~8.13	東一坊大路東側溝	土師器、須恵器、製塩土器、土馬	財)向日市埋蔵文化財センター
修理式遺跡第12次	2005.9.1~1.20	大路級道路溝10m分、北京極大路から6町(806.5m)北で確認 東一坊坊間大路東側溝	土師器	財)向日市埋蔵文化財センター
長岡宮跡第316次	1995.10.30~1997.1.28	北京極大路が小路規模であることが確定 北京極大路以北に街区を確認、南北幅は124m	土師器、須恵器、難波宮・平城宮・長岡宮式軒瓦	財)向日市埋蔵文化財センター
長岡宮跡第373次	1998.12.14~1999.3.31	一条条間大路南北西側溝		財)向日市埋蔵文化財センター
長岡宮跡第390次	2000.6.1~10.9	北一条大路南北西側溝、朱雀大路西側溝		財)向日市埋蔵文化財センター
長岡京跡左京第421次	1998.11.2~1999.5.14	一条条間大路が小路規模であることが判明		財)向日市埋蔵文化財センター
大藪遺跡1999年度	1997.12.8~1999.4.15	東三坊坊間小路西側溝、柵1条、掘立柱建物1棟、井戸1基	土師器、須恵器、瓦、獣骨	財)京都市埋蔵文化財研究所
大藪遺跡2001年度	2001.1.1~12.30	掘立柱建物3棟	土師器、須恵器、瓦	大藪遺跡発掘調査団



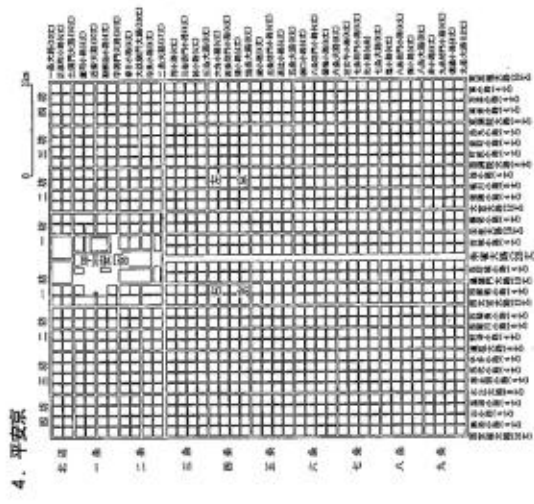
3: 長岡京 向田市 2001 『再探・長岡京』より



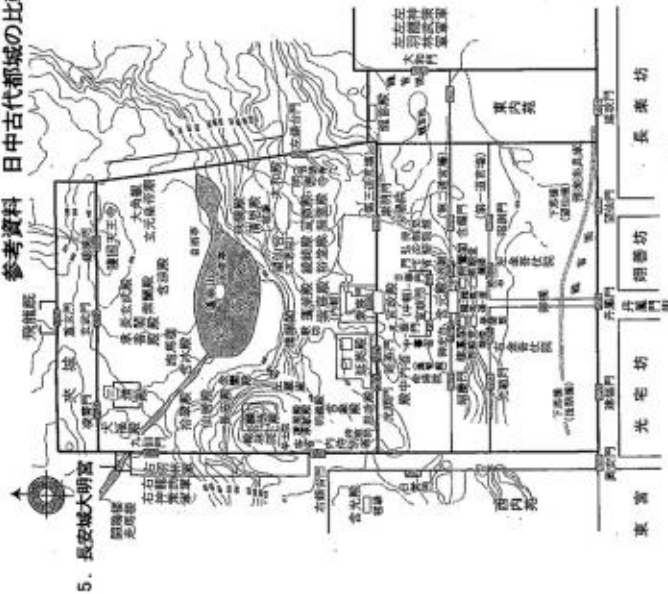
1: 藤原京



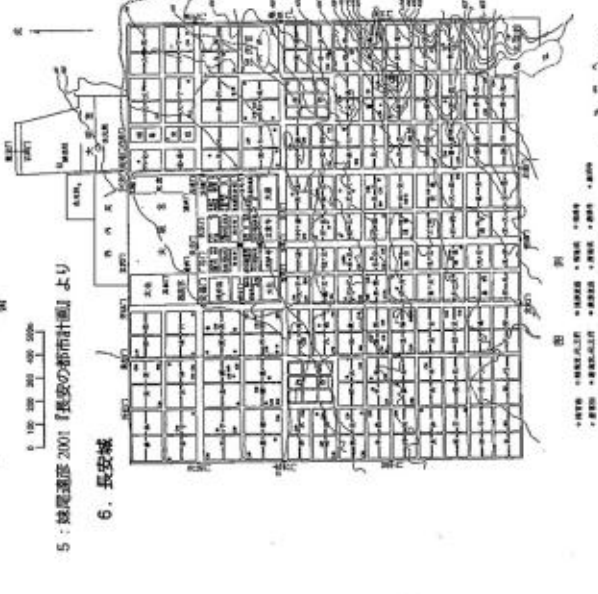
2: 平城京



4: (財)古代学協会 古代学研究所 1994 『平安京遺蹟』より



5: 長安城大明宮



6: 長安城

